「テレビ」	**5 人(83.3%)**	**29 人(100.0%)**	**35 人(100.0%)**
「雑誌」	2 人(33.3%)	**22 人(75.9%)**	**27 人(77.1%)**
「新聞」		11 人(37.9%)	17 人(48.6%)
「ｲﾝﾀｰﾈｯﾄ」		13 人(44.8%)	16 人(45.7%)
「友達」	2 人(33.3%)	17 人(58.6%)	22 人(62.9%)
「父親」		13 人(44.8%)	16 人(45.7%)
「母親」	2 人(33.3%)-両親	16 人(55.2%)	24 人(68.6%)
「兄弟」		3 人(10.3%)	8 人(22.9%)
「学校」	**1 人(16.7%)**	16 人(55.2%)	24 人(68.6%)

[HIV 関連の知識] HIV 関連の知識について、全体的に「延命治療」に関しての知識が低く、HIV 主な感染経路についての知識は比較的高いものであった。B と C グループを対象には避妊ピルについての質問も含まれ、その正解率は B グループでは 5 割程度で、C グループでは 7 割にも及ばなかった。(表の 21)

(表の 21)

[HIV 関連の知識に関しての正解率]			
	A グループ(有答数:7)	B グループ(有答数:29)	C グループ(有答数:35)
エイズはまだ完治できない	**42.9%(3 人)**	**69.0%(20 人)**	88.6%(31 人)
HIV に感染していても長く生きられる	**28.6%(2 人)**	**44.8%(13 人)**	**37.1%(13 人)**
性交渉を通して HIV に感染する可能性がある	85.7%(6 人)	100.0%(29 人)	94.3%(33 人)
スプーンやフォークでは HIV に感染しない	100%(7 人)	82.8%(24 人)	74.3%(26 人)
頬にキスでは HIV に感染しない	100%(7 人)	83.3%(15 人)	91.4%(32 人)
性交渉で他の病気にもかかる可能性がある	**28.6%(2 人)**	72.4%(21 人)	80.0%(28 人)
避妊ピルは HIV 感染予防にもなる		**48.3%(14 人)**	**68.6%(24 人)**

[講演会で取り扱って欲しいテーマ] 講演会で取り扱って欲しいテーマについては、全体的に「HIV/Aids」及び「STD」について知りたいと回答した人が多く見られ、次に「思春期」や「避妊方法」であった。(表の 22)

(表の 22)

[予防プログラムで取り扱いたいテーマ(複数回答可)]			
	A グループ(有答数:7)	B グループ(有答数:29)	C グループ(有答数:33)
「出産」	28.6%(2 人)	10.3%(3 人)	9.1%(3 人)
「妊娠」	28.6%(2 人)	31.0%(9 人)	21.2%(7 人)
「母･父親になること」	14.3%(1 人)	34.5%(10 人)	15.2%(5 人)
「誰かを好きなる」	14.3%(1 人)	51.7%(15 人)	30.3%(10 人)
「性交渉」	28.6%(2 人)	**62.1%(18 人)**	**54.5%(18 人)**
「避妊方法」	**42.9%(3 人)**	37.9%(11 人)	27.3%(9 人)
「HIV/Aids」	28.6%(2 人)	**65.5%(19 人)**	51.5%(17 人)
「STD」	14.3%(1 人)	**65.5%(19 人)**	**63.6%(21 人)**
「思春期」	28.6%(2 人)	**75.9%(22 人)**	**54.5%(18 人)**

介入方法

学校側のスペース、時間配分、生徒の年齢などを配慮しながら、2つグループに分けて2時間の講演会を用いて介入を行った。1つのグループは11歳から13歳まで（AとBグループのアンケート調査票の回答者に相当）、もう一つは14歳から17歳まで（Cグループのアンケート調査票の回答者に相当）。

年齢の低いグループは38人、そして年齢の高いグループは36人で構成された。

若いグループの講演会は医師が担当し、年齢の高いグループは感染者が担当をした。

テーマは共通で、主にHIV関連の内容で、HIV感染症の説明、感染経路、予防方法、コンドームについてであった。最後に、10分程度において、妊娠・避妊方法などについて情報提供を行った。

コンドームの説明は低年齢グループにおいては、ファシリテーターのデモンストレーションのみ行われたが、講演会のあと、数多くの生徒が実際に触ったり、質問などをした。もうひとつのグループについては、講演会中にコンドームなど配り、実際に触れたり、デモンストレーション時に、生徒間でも行った。

フォローウアップ調査の方法・結果

フォローアップ調査は講演会終了2週間後に行った。実施方法は、介入前と同様、教員が授業の合間にて行った。アンケート回収後、郵送にて調査員まで届けた。

フォローアップ調査はアンケート調査のみにて行われ、基本的にベースラインと同じ内容であり、さらにいくつか自由記載欄を「考え方の変化について」、「学んだこと」、「自由評価」などについて設けた。

回収率は11歳のアンケート調査で約43%（前7/後3）、12-13歳のもので約72%（前29/後21）、そして、14-17歳のもので約48%（前35/後17）であった。下記、HIV関連の知識についての結果を報告する。

[HIV関連の知識についての正解率]

HIV/AIDS/STD関連の知識における正解率は、全体的に介入後で上昇したが、11歳のグループでは回答者数が少ないため、上昇率の計算は行われず、12-13歳のグループでは全体的に11ポイント以上の正解率の上昇が見られた。また、14-17歳のグループでは「HIVに感染していても長生きできる」についてが最も大きな上昇率を示し、その他、「フォークやスプーンでは感染しない」と言う項目の正解率の上昇した。その他の項目については特に正解率が上昇したと言う結果は得られなかった(表の23)。

(表の23)

A グループ　[HIV関連の知識に関しての正解率]		
	介入前（有答数:7）	介入後（有答数:3）
エイズはまだ完治できない	42.9%	100.0%
HIVに感染していても長く生きられる	28.6%	66.7%
性交渉を通してHIVに感染する可能性がある	85.7%	100.0%
スプーンやフォークではHIVに感染しない	100.0%	66.7%
頬にキスではHIVに感染しない	100.0%	100.0%
性交渉で他の病気にもかかる可能性がある	28.6%	100.0%

B グループ　[HIV関連の知識に関しての正解率]			
	介入前（有答数:29）	介入後（有答数:21）	上昇率

エイズはまだ完治できない	69.0%	85.7%	16.7
HIV に感染していても長く生きられる	44.8%	61.9%	17.1
性交渉を通して HIV に感染する可能性がある	100.0%	100.0%	0
スプーンやフォークでは HIV に感染しない	82.8%	100.0%	17.2
頬にキスでは HIV に感染しない	83.3%	100.0%	16.7
性交渉で他の病気にもかかる可能性がある	72.4%	85.7%	13.3
避妊ピルは HIV 感染予防にもなる	48.3%	60.0%	11.8
C グループ [HIV 関連の知識に関しての正解率]			
	介入前（有答数:35）	介入後（有答数:17）	上昇率
エイズはまだ完治できない	88.6%	88.2%	-0.4
HIV に感染していても長く生きられる	37.1%	58.8%	21.7
性交渉を通して HIV に感染する可能性がある	94.3%	94.1%	-0.2
スプーンやフォークでは HIV に感染しない	74.3%	88.2%	13.9
頬にキスでは HIV に感染しない	91.4%	88.2%	-3.2
性交渉で他の病気にもかかる可能性がある	80.0%	82.4%	2.4
避妊ピルは HIV 感染予防にもなる	68.6%	58.8%	-9.8

3【在日ブラジル人を対象にソーシャルマーケティング法によるコンドーム普及に関する研究】

2001 年度に行われた調査の結果（ブラジル製品雑貨店の 98%がコンドームの販売を行っていなかった；日本滞在の年数が少ないほど日本でコンドーム購入が困難である；日本製のコンドームを経験した人の内、「きつい」又は「小さい」と感じた回答者は 50%以上であった）をふまえて、2002 年度は当コミュニティに最も適したコンドーム（一般に売れられているものより少々大きめ）の開発を行った。

開発にあったて、日本で発行されているポルトガル語週刊新聞（Jornal Tudo Bem）及び海外通話テレフォンカード会社（Brastel Liga es Internacionais）のスタッフの協力を得て、コンドームのパッケージ、パッケージ内の折りたたみパンフレット、PR ようのテレビコマーシャル、ポスター、チラシの作製を行い、前田貿易株式会社によってコンドームがブラジル製品雑貨店に並ぶようになった。

パッケージ製作及び PR 作成

開発期間は平成 14 年 5-11 月で、協力新聞社（Jornal Tudo Bem）のデザイナー3 名から 3 つのパッケージのイメージが提出され、「若く、最近来日したものを狙って」CRIATIVOS のメンバー5 名により 2 つの案が作用された。さらに、HIV 関連に係っていない別の男性 4 名、女性 6 名、計 10 名に選んでもらい、最終的に 1 つの案が作用された。

作用されたパッケージのイメージをもとに PR の方向も決め、テレビコマーシャル、ポスター、チラシの製作にあたった。

パッケージの中にポルトガル語による折りたたみ式パンフレットを入れ、その内容は「HIV/STD 関連の基本的な情報」、「コンドームの使い方」、「HIV 検査場所の案内」、「相談窓口の案内」などである。

また、PR の主なメッセージは「良いセックスは安全で意識したものである。いつもコンドームを使いましょう。」であった。テレビコマーシャルは 15 秒のものをポルトガル語有料チャンネル IPCTV にて 1 ヶ月間放送され（24 コマ）、新聞では 2 ヶ月の間報告が載せられた（6 回）。

また、IPCTV のニュース番組などにとりあげられ、その時元サッカー選手のラモス氏による宣伝も行われた。

販売

10月21日に前田貿易が市場へおろし始め、10月28日にはポルトガル語メディアへ当コンドーム開発・販売の発表が行われた。当コンドームは、ブラジル製品（衣類、雑誌、CD、香水などの雑貨）を輸入し、日本国内の雑貨店の90%以上に製品を卸している前田貿易がコンドームのロットごとを買い取り、販売にあたっている。

評価

2002年3月の時点で雑貨店の約40%に行き渡っているが、売れ行きは「いまいち」と言う一般的な評価である。「雑貨店のオーナー自身がコンドームを店に置かない」と言う状況が多く見られている。2003年度4月より、当コンドームの評価及び売上の状況についての調査を行う予定である。

4【在日ラテンアメリカ系市民を対象に予防介入人材育成に関する研究】※日伯プロジェクトと兼ねて

在日ラテンアメリカ系市民コミュニティにおけるHIV/STD予防介入活動者を育成するために、最も適切な研修方法を見出すことを目的とする研究であるが、平成13-14年で合計6つの研修を行った。5つの研修は当コミュニティの一般人、つまりマスメディアを通しての募集に応じた人、1つは特別に在日ブラジル人向けの学校の先生を対象としたものであった。

当コミュニティ一般人向けの研修は2日間に渡り、16時間のものであったのに対し、学校の先生を対象にしたものは1日、9時間のものであった。

研修の評価の方法

研修の評価は一般向けの研修のみに対して行われ、参加者を対象にretrospective的なアンケート調査を平成14年11月から15年2月まで行われた。

アンケート調査は郵送方式で行われ、アンケート調査の目的と協力依頼文書、記入方法の説明文、調査票及び、返信用の封筒を同封して研修参加者に送り、その返信を待った。

参加者63名のうち、既に8名は帰国していたため、55名を対象にアンケート調査を送り、依頼した。

アンケート調査の内容は研修参加前と後を比較したもので、「HIV/STDに関する話を気楽に出来るか」、「HIV 関連いついて誰に相談したか」、「HIV 予防関連と活動に参加したか」、「HIV 予防関連について誰かに話をしたか」、「HIV 関連以外でボランティア活動に参加したか」、そして研修後における自分自身について「研修で学んだことを実践しているか」、「レギュラー及びカジュアル・セックス・パートナーとのコンドーム使用の変化について」、「HIV抗体検査について」、そして自由記載欄を設け、自分自身がどのような変化かを書くスペースになっている。

研修の評価の結果

「回収率・属性」

依頼数55件のうち、1名の郵便物は返送され、その他、22名からの回答が寄せられ、回収率は約41%であった。回答者のうち、女性が16人、男性が6人であった。

回答者22人の内、13人が何らかのボランティア活動を行っていた、また、そして、既にHIV関連の何らかの予防活動を行った経験がある人が8名であった。

「対外的変化」

「エイズ関連のお話をする時の“気楽度”」については研修後の方が、「全く気楽に話せる」に変わった回答者が1名、「結構気楽に話せる」に変わった人が6名、「まあまあ気楽であった」および「余り気楽ではなかった」への回答は研修後には存在しなかった。

「エイズ関連で誰かに相談をしたか」と言う質問について、研修を受けた後に相談をした回答者が増加した（前8人：後11人）。

「HIV 予防関連の活動をしたか」と言う質問に対し、研修前に活動をした人が 8 名で、後は 9 名であった。

「HIV 予防について誰かに話したか」については、研修前に話をしている人が 17 名、研修を終えてから話をしている人が 20 名に上った。(表の 24)

「自分自身の変化」

研修を経験し、自分自身の変化については、特定(レギュラー)セックスパートナーとのコンドーム使用の変化については、「変化無し、いつも使わない」と答え人が 4 人 (26.7%：特定パートナーはいない、不明を省いて) (表の 11)、また、非特定(カジュアル)セックスパートナーとのコンドーム使用の変化について「変化無し、いつも使う」を選択した回答者が最も多く、62.5% (不明、非特定パートナーはいないを省いて) であった。(表の 25)

HIV 検査の経験について、実際に研修後に「HIV 検査を受けた」と答えた人は 1 人のみであった。(表の 26)

〔表の 24〕

2002 年度　HIV 関連予防活動者育成研修の評価調査「研修前後における対外的変化」				
	研修前		研修後	
	数	%	数	%
HIV 関連のお話をする時の"気楽度"				
全く気楽であった	9	42.9	10	47.6
結構気楽であった	5	23.8	11	52.4
まあまあ気楽であった	5	23.8	0	0.0
余り気楽でなかった	1	4.8	0	0.0
難しいかった	0	0.0	0	0.0
その他	1	4.8	0	0.0
サンプル数	21		21	
エイズ関連で誰に相談した頃があるか？				
いいえ	14	63.6	10	47.6
はい	8	36.4	11	52.4
サンプル数	22		21	
HIV 予防関連の活動をしたことがあるか？				
いいえ	14	63.6	13	59.1
はい	8	36.4	9	40.9
サンプル数	22		22	
HIV 予防について誰かに話したか？				
いいえ	5	22.7	2	9.1
はい	17	77.3	20	90.9
サンプル数	22		22	

〔表の 25〕

2002 年度　HIV 関連予防活動者育成研修の評価調査「パートナーとコンドーム使用状況」				
	レギュラー		カジュアル	
	数	%	数	%
パートナーはいない	5	25.0	8	50.0

減少なくした	0	0.0	0	0.0
使い始めた	1	5.0	0	0.0
増加した	0	0.0	0	0.0
いつも使うようになった	1	5.0	2	12.5
変化無し、いつも使う	6	30.0	5	31.3
変化無し、ほとんどいつも使う	0	0.0	0	0.0
変化無し、時々使う	2	10.0	1	6.3
変化無し、余り使わない	0	0.0	0	0.0
変化無し、使わない	4	20.0	0	0.0
その他	1	5.0	0	0.0
サンプル数	20		16	

〔表の 26〕

2002 年度　HIV 関連予防活動者育成研修の評価調査「HIV 検査の経験」		
	数	%
研修前に受けた	7	33.3
研修後に受けた	1	4.8
受けたいと思うがまた受けていない	8	38.1
受け様と思わない	4	19
その他	1	4.8
サンプル数	22	21

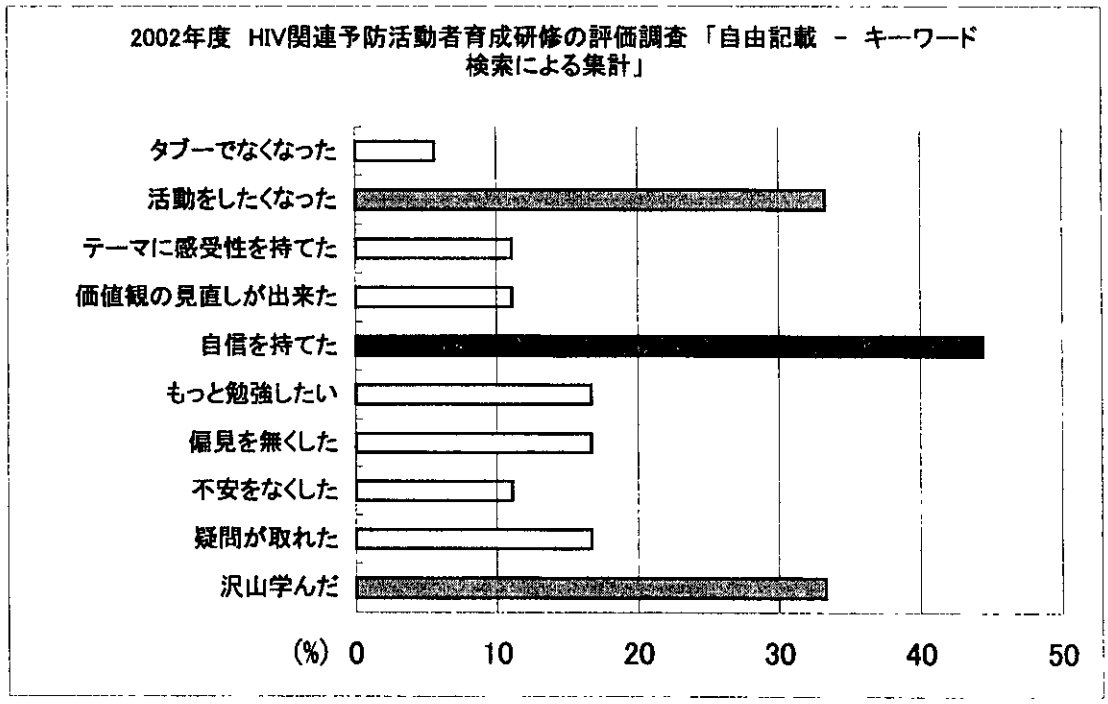
「自由記載評価」

自由記載欄において、回答のコード化を行った上で、キーワードによる単純集計の結果、最も多く記載されていたキーワードは「自信を持てた」で、回答者の 44.4%が記載し、次に「沢山学んだ」及び「予防活動をしたくなった」と記載した人が 33.3%であった。また、「もっと勉強をしたい」、「偏見を無くすことが出来た」、「疑問だのを取り除くことが出来た」を記載した人が 16.7%、そして「テーマに感受性をもてるようになった」、「価値観の見直しが出来た」、「不安を無くすことが出来た」などの記載者は 11.1%であった。(図の

その他、実際に活動をしてみると「“コンドームなどについて”、“プライバシーに係るから”、“個人の価値観などに係るから” 一般の人は話をしたがらい」、「一般の人の意識を高める必要がある」、「バリアーを調べる必要がある」と言う難しさが挙げられていた。

研修実施の方法について、「ファシリテーターの役割」、「グループでの活動」なを学んだと言う記載者もいた(図の 9)。

(図の 9)



「その他の効果」

「HIV 関連の予防活動」について、研修前で既に行っていたが 8 人であったのに対し、研修後 9 人に上っていた。

また、研修後、研修参加の中心に 2002 年 7 月頃に研修の参加 5 名を含む HIV 予防活動グループが形成され、浜松市で活躍中である(グループ名：Preserv-Ativos)。

そして、CRIATIVOS に直接係り、予防活動に積極的参加している人が 4 名である。

5【在日スペイン語系市民を対象に HIV 関連の知識・行動に関するベースライン調査】

1998 年度、第 1 次予防介入を実施し、その結果、特に 30 代才の女性にて情報が浸透し、HIV 関連の知識が上昇したが、その他の層では特に効果は見られなかった。そこで、2002 年度からに当コミュニティ全体を対象とした第 2 次予防介入への準備を開始した。

ベースライン調査の方法

第 2 次予防介入におけるベースライン調査は、2002 年 10～11 月に行われ、東京都のペルー領事館及び Kyodai 雑貨店(同場所にて共有スペース)、静岡県掛川市の El Buen Gusto、そして栃木県小山市の La Frontera レストラン・雑貨店にて、アンケート調査を実施した。

調査方法は、その日、その場所を訪れた人に無差別・連続的にアンケート調査を依頼し、その場で記入してもらい、回収した。尚、アンケートの依頼は明らかに子供及び高齢者を除いて行い、回答者へは、ボールペンを礼品とした。

アンケート内容は「属性：性別、年齢、所在地、国籍、学歴、居住状況」、「情報獲得状況」「HIV/STD 関連の知識」、「コンドーム使用状況」、「コンドーム購入状況」、「アルコール、ドラッグ使用状況」、「STD 感染状況」、「HIV 抗体検査の経験状況」などであった。

ベースライン調査の結果

「回収率・属性」

ベースライン調査の回収率は全体的に高く、90%前後であった（表の 27)。男女の比率は男性 252 (63.5%) に対し、女性 145 (36.5%) で、男 1.7：女 1 であった（表の 28)。年齢構成は、20 歳代が最も多く、約 34%を占め、平

均年齢は約 32 歳（±10.35）であった(表の29)。日本での滞在年数の平均は約 7 年 4 ヶ月で長いことが判明した（表の 30)。回答者の国籍については、約 94%がペルー国籍で、次にボリビア国籍が 1.3%、アルジェンチン及びコロンビア国籍がそれぞれ 1.0%であった（表の 31)。また、「現在、誰と住んでいますか？」（複数回答可）と言う質問に対し、「配偶者と住んでいる」と回答した者が、約 50%、「父親」、「母親と住んでいいる」と答えた人がそれぞれ 9.1%、また、「恋人と住んでいる」と答えた人が 8.6%で、「その他」の回答の内訳は、ほとんどが「ひとり暮らし」であると答えた（表の 32)。

(表の 27)

2002 年度 在日スペイン語系市民を対象に HIV 関連知識・行動調査 「アンケート調査サイト・回収率」			
サイト	依頼件数	回答件数	回収率
東京都(Kyodai/ペルー領事館)	293	265	90.4
掛川市(El Buen Gusto)	35	30	85.7
小山市(La Frontera)	116	112	96.6

(表の 28)

2002 年度 在日スペイン語系市民を対象に HIV 関連知識・行動調査 「性別」		
	数	%
女性	145	36.5
男性	252	63.5

(表の 29)

2002 年度 在日スペイン語系市民を対象に HIV 関連知識・行動調査 「年齢構成」		
	数	%
10 才代	23	5.9
20 才代	130	33.6
30 才代	143	37
40 才代	73	18.9
50 才代	18	4.7
サンプル数	397	387
平均値	31.8 ±10.35	

(表の 30)

2002 年度 在日スペイン語系市民を対象に HIV 関連知識・行動調査 「滞在期間分布」		
	数	%
1 年未満	10	2.6
1-2 年	27	6.9

2-3 年	37	9.4
3-4 年	19	4.8
4-5 年	27	6.9
5-6 年	39	9.9
6-7 年	16	4.1
7-8 年	14	3.6
8-9 年	25	6.4
9-10 年	28	7.1
10 年以上	150	38.3
サンプル数	397	392
平均値	88.37 ±49.08	

(表の 31)

2002 年度 在日スペイン語系市民を対象に HIV 関連知識・行動調査「国籍分布」		
	数	%
Peru	372	93.7
Paraguay	2	0.5
Bolivia	5	1.3
Colombia	4	1.0
Argentina	4	1.0
Mexico	1	0.3
その他	9	2.3
サンプル数	397	397

(表の 32)

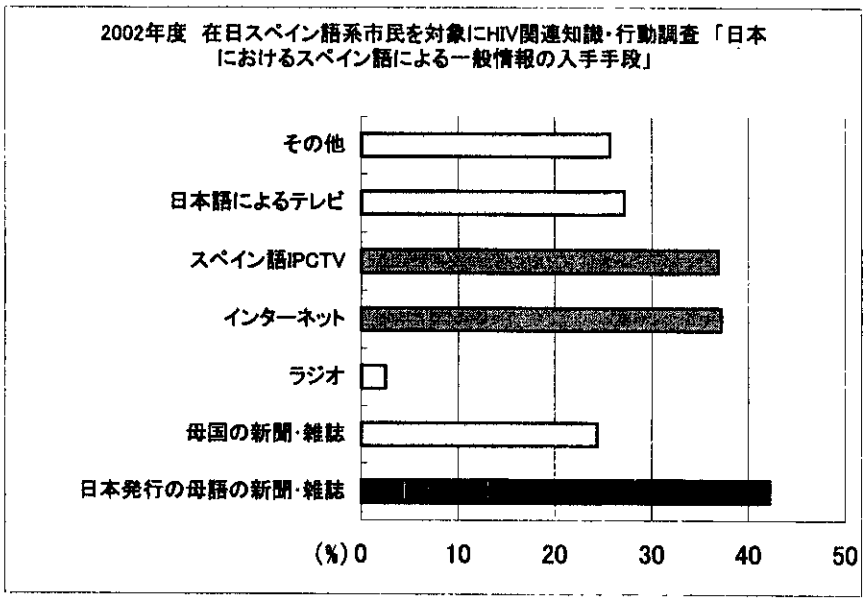
2002 年度 在日スペイン語系市民を対象に HIV 関連知識・行動調査「住居における同居人状況」		
	数	%
父親	36	9.1
母親	36	9.1
兄弟	45	11.4
配偶者	195	49.2
恋人	34	8.6
仕事仲間	13	3.3
友人	17	4.3
その他	84	21.2
サンプル数	397	396

「一般情報の獲得状況」

当コミュニティの約 43%が「日本で発行されているスペイン語による新聞・雑誌」を情報源としていて、次に「スペイン語の有料テ

レビチャンネル-IPCTV」と「インターネット」をそれぞれ約38%が情報源としている。また、約25%がそれぞれ「日本のテレビ」、「母国の新聞・雑誌」などを情報入手源としている。（図の10）

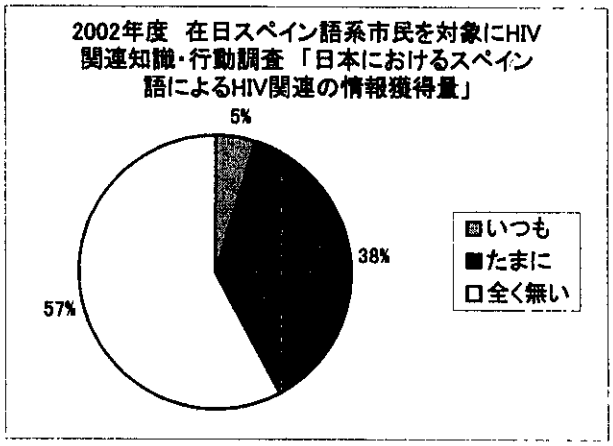
（図の10）



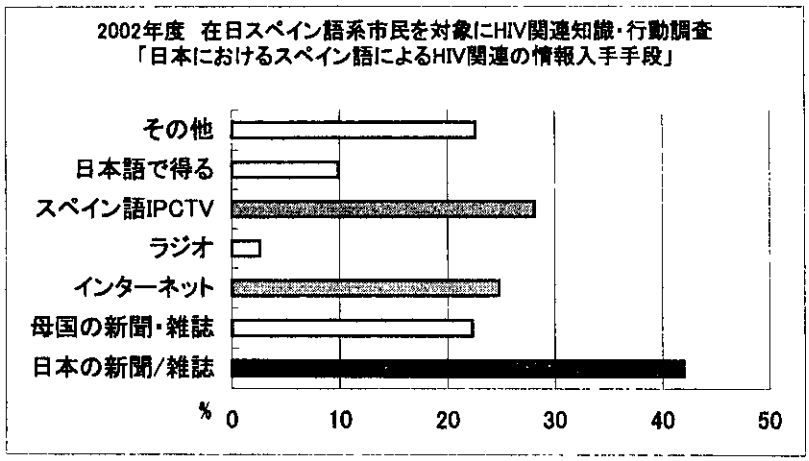
「HIV関連情報の獲得状況」

HIV関連の情報獲得量について、57%が「全く得ていない」と答え、「たまに得ている」と答えた人が38%であった（図の11）。そして、その情報源は42%が「日本で発行されている新聞・雑誌」で、次に「スペイン語のIPCTV」が約28%、「インターネット」が約24%、そして、「母国の新聞・雑誌」が約22%であった。尚、「日本語で得る」と答えた人が約10%であった。（図の12）

（図の11）



（図の12）



「HIV 関連の知識」

HIV 関連の知識について各項目に対しての正解率は下記の通りであった：

「コンドームを使用しない性交渉で感染の可能性がある」－ 約 93%

「健康に見えても HIV に感染している可能性がある」－ 約 88%

「感染者に抱擁やキスをしても HIV に感染しない」－ 約 88%

「感染者とスプーンやフォーク共有しても HIV に感染しない」－ 約 80%

「HIV 感染症はまだ完治できない病気である」－ 約 77%

「感染者とお風呂やプールの共有で HIV に感染しない」－ 約 70%

「感染している母親から妊娠中、出産、母乳を通して子供が感染する可能性がある」－ 約 68%

「淋病」、「梅毒」、「性器ヘルペス」も STD である－ 約 68%

「STD に感染していると HIV に感染しやすい、移しやすい」－ 約 54%

「HIV に感染しても治療によって長生きできる」－ 約 35%

「感染者を刺した蚊から HIV 感染しない」－ 33%

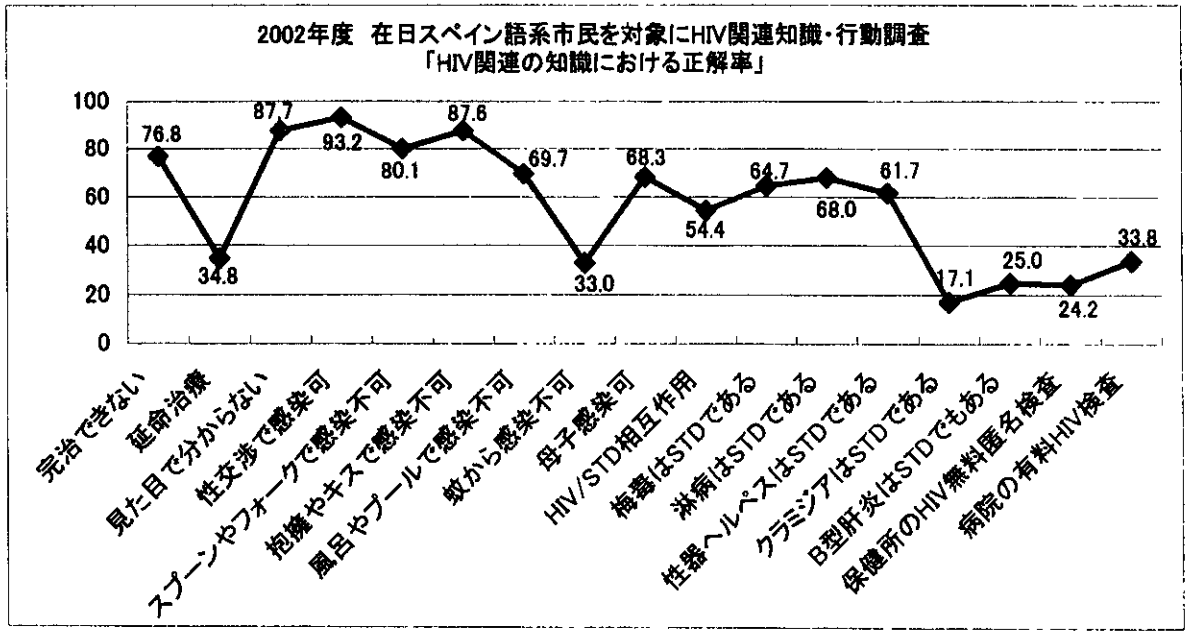
「B 型肝炎も STD の 1 つである」－ 25%

「クラミジアも STD の 1 つである」－ 約 17%

また、日本における HIV 抗体検査サービスの認知度について、「保健所の無料匿名 HIV 検査サービス」を知っていたものが 24.2%で、「病院やクリニックの有料検査サービス」について知っていた人が焼く 34%と、低い認知率であった。(図の 13)

HIV 抗体検査の結果が陽性の場合、「会社に知られたら解雇される」不安を持っている人が約 89%で、「政府に知られたら国外追放される」不安を持っている人が約 63%であった。

(図の 13)

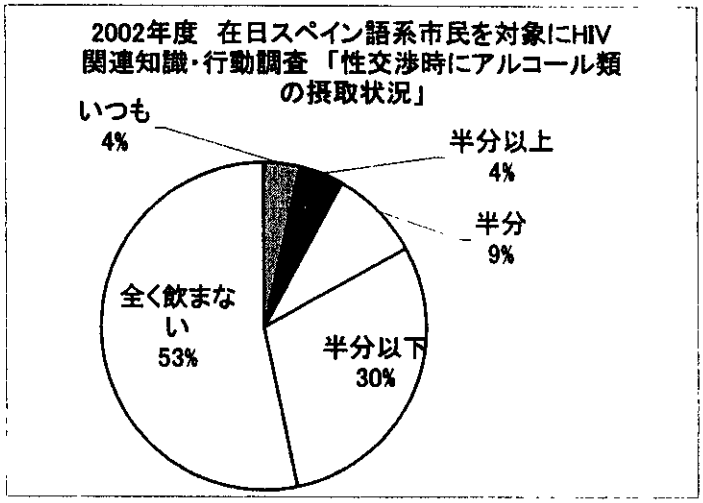


「性交渉時にアルコールやドラッグ使用状況」

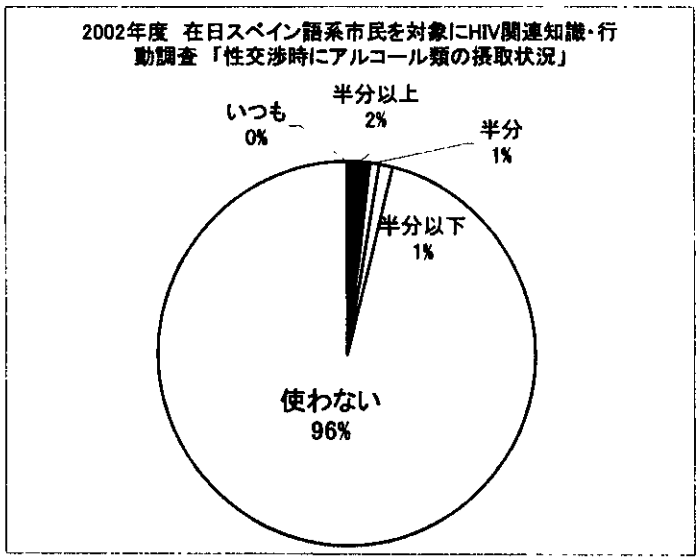
セックスをする前に「アルコール類を殴位飲みますか」と言う質問に対し、アルコール類を飲み、性交渉をもつ人のみの間では、「アルコール類を飲まない」と答えた人が 18%、「性交渉が無い」と答えた人が 5%であり、「全く飲まない」と答えた人が最も多く約 53%であった。次に「半分以下」飲むと答えた人が約 30%で、「半分以上」、「いつも」飲んでいると答えた人がそれぞれ約 4%であった。(図の 14)

そして、セックスをする前に「ドラッグ類を使用しますか」と言う質問に対し、「ドラッグ使わない」と回答した約 32%及び、「性交渉を持たない」と回答した約 3%の回答者を除いて、セックス前にドラッグを「全く使用しない」と答えた人が約 96%で、その他は 1%前後であった。(図の 15)

(図の 14)



(図の 15)



「STD 感染の病歴」

アンケート調査の回答者のうち、13.4%が「STD のために病院へ行った」と回答し(有効回答数:157)、STD のために病院へ必要性があったが行かなかった理由として「母国の薬を使用した」と答えた人が約 14%、「民間療法を使用した」と答えた人が 8.2%、「健康保険がなかった」と回答したものが 7.3%であった。(表の 33)

(表の 33)

2002 年度 在日スペイン語系市民を対象に HIV 関連知識・行動調査 「STD のために病院へ行かなかった理由」		
	数	%
恥かしいかった	11	10.0
母国の薬を飲んだ	16	14.5
民間療法をした	9	8.2
病院が分からなかった	7	6.4
日本語が出来ない	7	6.4
健康保険が無い	8	7.3
その他	60	54.5
サンプル数	397	110

「コンドーム使用の状況」

在日スペイン語系市民のコンドームの使用状況について、過去 6 ヶ月の間、レギュラーセックスパートナーとコンドームを「いつも」、「半分以上」使用したと回答した人は 32.7%、カジュアルセックスパートナーと「いつも」、「半分以上」コンドームを使用した回答者は 45%であった。また、最後の性交渉でコンドームを使用したひとが、レギュラー、カジュアル共に 40%を下回った。(表の 34)

(表の 34)

2002 年度 在日スペイン語系市民を対象に HIV 関連知識・行動調査 「コンドームの使用状況」		
	ステディーパートナー	カジュアルパートナー

	数	%	数	%
過去6ヶ月間でのコンドームの使用率				
いつも使用	74	21.4	76	39.8
半分以上	39	11.3	10	5.2
半分	27	7.8	8	4.2
半分以下	37	10.7	9	4.7
使わない	169	48.8	88	46.1
サンプル数（%ベース）	397	346	397	191
最後のセックスでのコンドーム使用				
使用した	130	34.5	128	39.5
サンプル数	397	377	397	324

「日本でのHIV抗体検査の経験」

日本でHIV抗体検査経験の有無について、回答者の15.6%が経験していた。HIV検査を受けていたに理由として、「結婚している」をあげた回答者が約32%、「特定のセックスパートナーがいる」と答えた人が約39%であった。「その他」と回答した約13%の内訳は主に「必要が無い」と言う回答であった。（表の35）

（表の35）

2002年度 在日スペイン語系市民を対象に HIV関連知識・行動調査 「HIV検査を受けなかった理由」		
	数	%
コンドームをいつも使う	42	13.1
知人のみとセックスする	19	5.9
結婚している	103	32.2
特定Pがいる	124	38.8
場所が分からない	26	8.1
時間が無い	24	7.5
日本語が出来ない	18	5.6
結果が怖い	7	2.2
ゲイではない	11	3.4
レズビアンではない	4	1.3
IDUではない	13	4.1
CSWではない	4	1.3
その他	41	12.8
サンプル数	397	320

「HIVに感染への自己リスク認知」

回答者自身がHIVに感染するリスクの評価について、「あなたがHIVに感染する可能性をどのように思いますか」という質問に対し、「全く無い」と答えた人が約23%、「少々ある」は約42%、「半分くらいある」が約6%、「結構ある」と回答したひとが16.6%であった（表の36）。

（表の36）

2002年度 在日スペイン語系市民を対象にHIV関連知識・行動調査「HIVに感染する可能性をどのように思いますか」		
	数	%
全く無い	90	23.7
少々ある	161	42.4
半分ある	23	6.1
結構ある	63	16.6
既に感染していると思う	0	0
その他	43	11.3
サンプル数	397	380

予防介入方法

在日スペイン語系市民を対象に第2次予防介入方法として、ベースライン調査の結果を踏まえて、主に、日本で発行されているスペイン語の新聞や雑誌、IPCTV などを通して行う予定である。また、スペイン語系コミュニティは多国籍の市民で構成されているが、その 94%がペルー国籍であるため、彼らの文化的背景などをに注意しながら、介入パッケージを企画し、実施する予定である。予防介入は2003年6-7月に実施する予定である。

【考察・今後の課題】

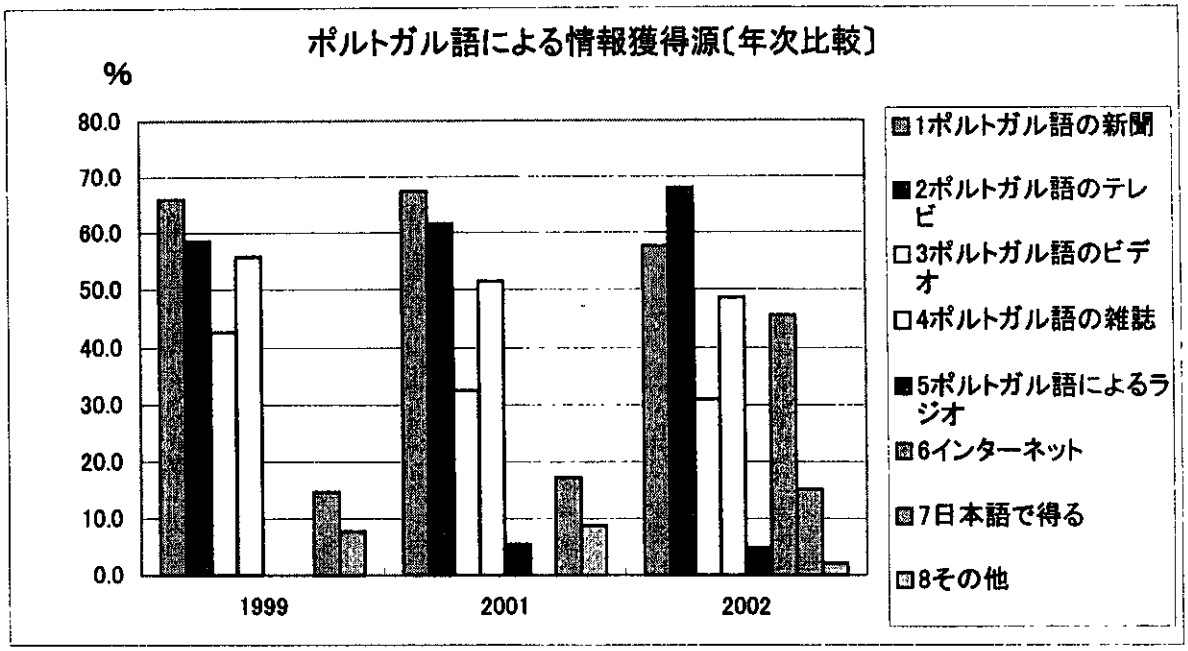
在日ブラジル人コミュニティを対象とした第2次予防介入のベースライン調査の結果より、過去に行った1999年、2001年の調査と比較すると、情報源の変化が見られる。時がたつにつれ、テレビと言う情報手段が新聞を上回って、2002年の調査ではインターネットが情報源の4割を占めた。雑誌やビデオは減少している傾向が見られる。しかし、日本語で情報を獲得する人の割合はほぼ横倍である〔図の16〕。

従って、在日ブラジル人コミュニティにおける情報源の変化（新聞からテレビへ；インターネット）、年齢によって獲得手段の差（若い層：テレビ；年輩層：新聞）、などの結果を踏まえて、ターゲットを絞って、それに適した予防キャンペーンの企画・実施が必要である。

滞在年数が長くなっているにもかかわらず、日本語での情報獲得率は依然として低く、継続的にポルトガル語での情報提供が必要である。

ポルトガル語有料テレビチャンネルの普及に伴い、当コミュニティが母国のHIV関連の放送からも影響を受けるので、それに配慮し、日伯間で情報交換を行いながら、予防介入の企画を立てる必要がある。

（図の16：HIV/Aids/STD関連の知識・行動調査：1999年、2001年、2002年の結果比較。サンプル数1999年：773、2001年：365、2002年：559）



在日ブラジル人学校を対象としたパイロット予防介入について、全体的に性やエイズ関連の情報源は「テレビ」が最も大きな割合を占めるが、性に関する情報は「母親」、「学校の友達」などが情報源となっているが、「エイズ関連」の情報については「テレビ」、がその大半を占めた。

また、「性・セクシュアリティー」関連の情報提供の量は学校によって異なり、また、その学校側の姿勢は調査研究、予防プログラムの受け入れなどにも影響していると考えられる。

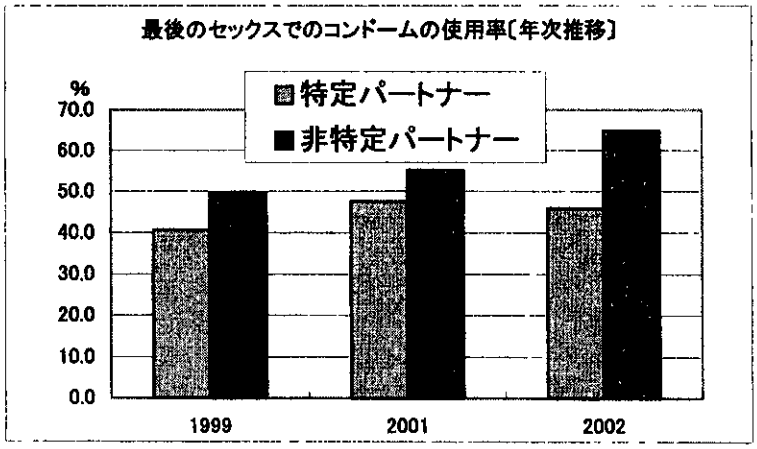
HIV 関連の知識のみの分析により、件数は少ないが、全グループで、知識項目の正解率の上昇から、全体的に効果的であったと考えられる。

尚、今後、HIV/STD、セクシュアリティー関連における態度、行動などの分析を進め、効果的な介入プログラムを構築し、在日ブラジル人学校の予防介入プログラムへの感受性を強化し、実施する必要がある。

コンドームの使用状況については、2002 年の結果を 1999 年、2001 年の調査における結果との比較により、特に「カジュアルセックスパートナーとの最後の性交渉」でコンドームを使った人が増加傾向であることが示された〔図の 17〕。この原因についてはまだ分析中であるが、最近目立っている IPCTV を情報源としている人が増加し、この現象に伴って、当コミュニティは母国のテレビ番組などに暴露する機会が増加し、その影響などが反映している可能性がある。従って、予防介入後のアンケート調査にて、この理由を探る必要性がある。

セックスネットワークについて、全体的「過去 1 年間」のセックスパートナーの数は 1.9～2.5 人で、1 人と回答した人が 60%以上で、比較的少ないと言える。

(図の 17：HIV/Aids/STD 関連の知識・行動調査、1999 年、2001 年、2002 年結果比較。サンプル数：1999 年特定：604、非特定：202；2001 年特定：295、非特定：183；2002 年特定：408、非特定：185)



HIV 関連予防の人材育成研の評価については、修参加者の 17.5%が直接的に予防活動にかかわり、対外向けの行動には効果的であったが、参加者自身の行動変容には繋がらなかった為、今後は、さらに内面的な部分に触れる研修プログラムの企画が必要である。

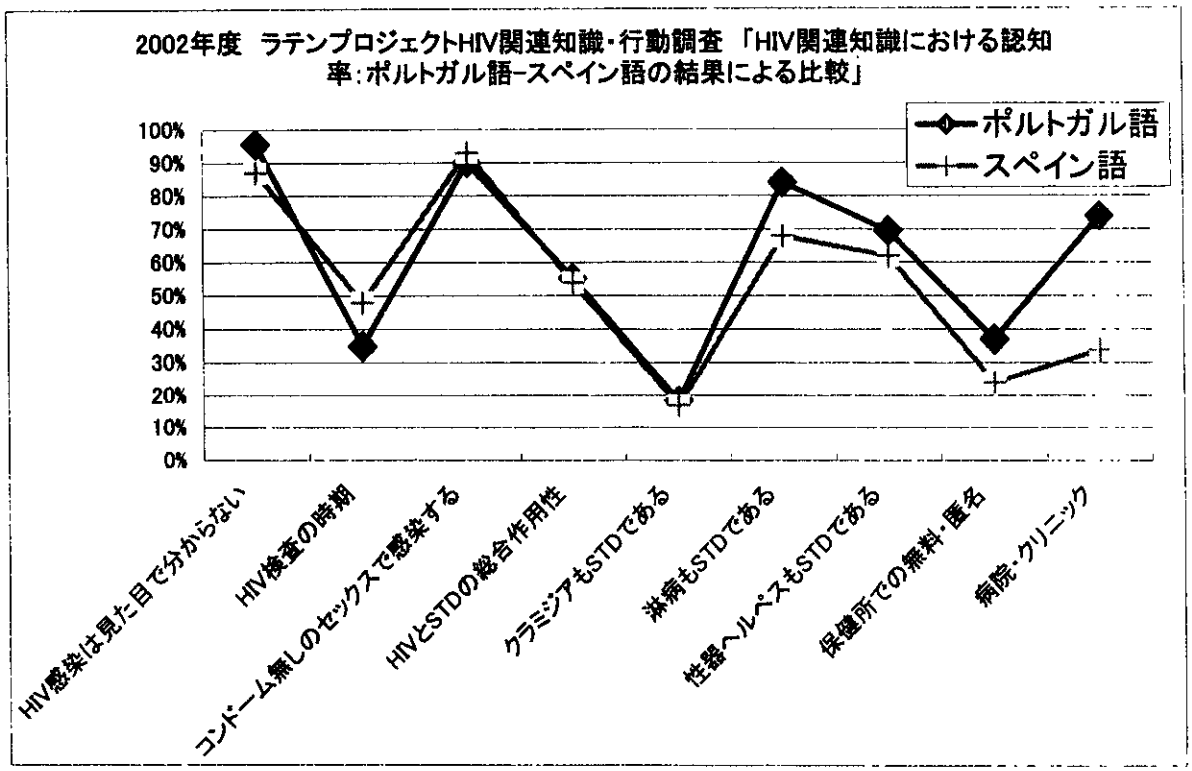
また、自由記載欄の結果により、「自信がついた」と言うキーワードが最も多く見ら、「活動をしたくなった」や「沢山学んだ」が多く挙げられていた。しかし、実施に活動をした人の中からは、「話に入るの難しい」、「一般の人の意識が低い」、「個人的、かつ個人の価値観に触れるものである為、話をするの難しい」なども書かれていた為、継続的に研修を行い、予防介入を行っている場面のロールプレーなども交えた研修企画が必要とされる。

在日スペイン語系コミュニティを対象に行った「HIV 関連の知識・行動調査」の結果より、その 94%がペルー国籍であった為、当コミュニティは多国籍の人々で形成されているが、予防介入は主にペルー人を対象として行いことが出来る考えられる。そして、その主な媒体は日本で発行されているスペイン語の新聞・雑誌、スペイン語の IPCTV である。

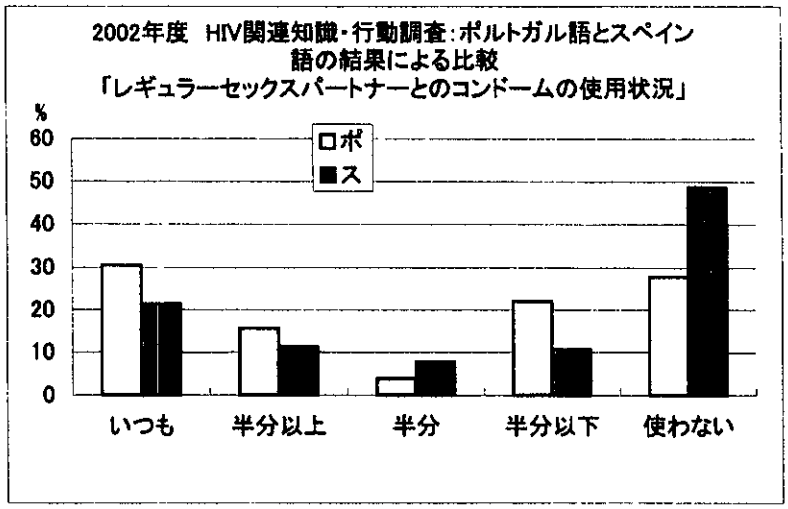
また、HIV 関連知識・行動調査を在日スペイン語系と在日ブラジル人の比較を行う、日本にける特に HIV 検査サービスについての認知率はスペイン語系の人々はポルトガル語より低いことが判明し、次に STD 関連に知識も低いことが示された。予防介入時、このような情報の提供を重視する必要がある。(図の 18)

さらに、この 2 つのコミュニティにおけるコンドーム使用状況の比較を行う、全体的スペイン語のコミュニティのほうがコンドームの使用率が低いことが示され、今後のこの背景及び、コンドーム使用の向上を促す予防介入を企画する必要がある(図の 19、20、21)。

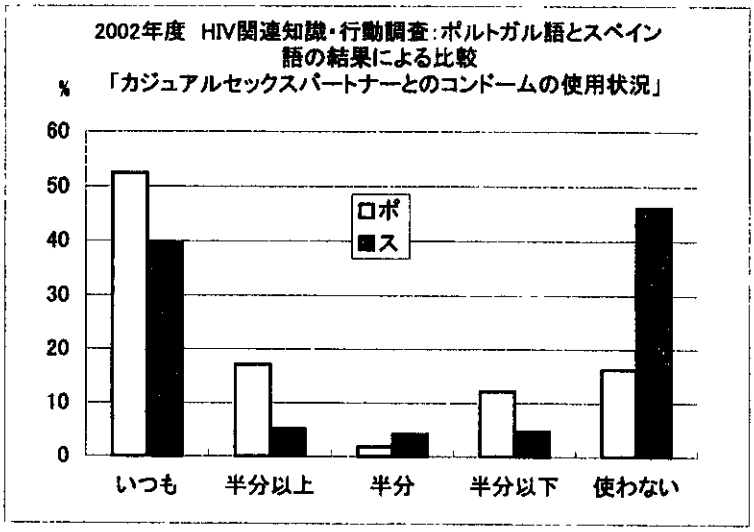
(図の 18)


2002年度 ラテンプロジェクトHIV関連知識・行動調査 「HIV関連知識における認知率:ポルトガル語-スペイン語の結果による比較」
ポルトガル語
スペイン語
100%
90%
80%
70%
60%
50%
40%
30%
20%
10%
0%
HIV感染は見た目で分からない
HIV検査の時期
コンドーム無しのセックスで感染する
HIVとSTDの総合作用性
クラミジアもSTDである
淋病もSTDである
性器ヘルペスもSTDである
保健所での無料・匿名
病院・クリニック

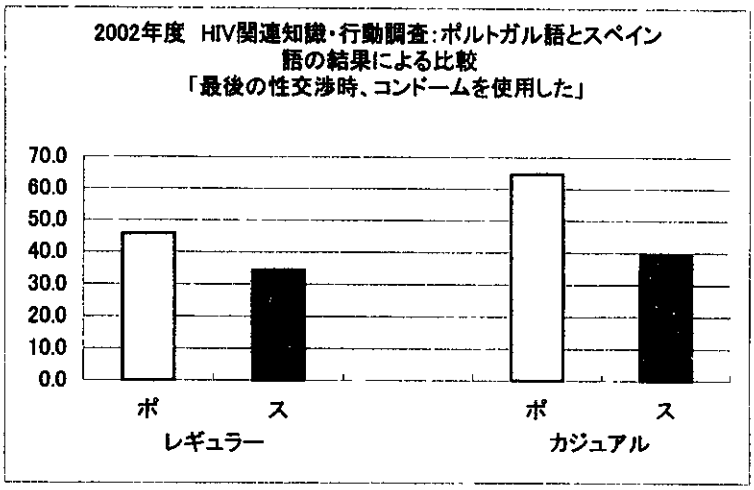
(図の 19)


2002年度 HIV関連知識・行動調査:ポルトガル語とスペイン語の結果による比較
「レギュラーセックスパートナーとのコンドームの使用状況」
%
60
50
40
30
20
10
0
ロポ
ス
いつも
半分以上
半分
半分以下
使わない

(図の 20)


2002年度 HIV関連知識・行動調査:ポルトガル語とスペイン語の結果による比較
「カジュアルセックスパートナーとのコンドームの使用状況」
%
60
50
40
30
20
10
0
ロポ
■ス
いつも
半分以上
半分
半分以下
使わない

(図の 21)


2002年度 HIV関連知識・行動調査:ポルトガル語とスペイン語の結果による比較
「最後の性交渉時、コンドームを使用した」
70.0
60.0
50.0
40.0
30.0
20.0
10.0
0.0
ポ
ス
レギュラー
ポ
ス
カジュアル

薬物乱用・依存者におけるHIV感染の実態と ハイリスク行動についての研究

グループ長：和田　清（国立精神・神経センター精神保健研究所薬物依存研究部）
班　　員：石橋正彦（十全病院）、小田晶彦（国立下総療養所）、中村亮介（都立松沢病院）、前岡邦彦（瀬野川病院）、森田展彰（筑波大学）
研究協力者：飯田信夫（回生病院）、伊波真理雄（雷門メンタルクリニック）、岩井喜代仁ほかスタッフ（茨城ダルク）、尾崎　茂（国立精神保健研究所）、高　直義（久米田病院）、末次幸子（筑波大学医学研究科）、津久江一郎（瀬野川病院）、藤原永徳（久米田病院）

研究要旨　① 薬物乱用・依存者におけるHIV感染を含めたSTD感染の実態を把握し、あわせて、注射器注射針の使用実態、性行動等HIV感染に関わるハイリスク行動を調査することによって、薬物乱用・依存者に対するHIV対策の基礎資料に供することを目的とした。② 研究は「1.精神科医療施設に入院した薬物依存・精神病患者調査」（以下、病院群）、「2.医療機関を受診していない薬物依存者調査」（以下、非病院群）、「3.精神科医療施設に入院した外国人精神障害者調査」（以下、外国人群）の3部門調査から成っている。各研究においては、対象者の同意の下で、調査用紙によるハイリスク行動の聞き取り調査と採血による血清学的検査を実施した。③ 病院群調査において、2名の新規HIV感染者が認められた。1993年より開始された本調査において、感染者が認められたのは、昨年（2001年）の1名が始めてであったが、2002年調査では新規に2名であり、いよいよこの対象群にもHIV感染の浸透が始まりつつある可能性が危惧された。④ 感染ルートは、1名は注射使用による薬物乱用者（IDUs）間での感染であり、1名はMSM間での性行為によると推定された。⑤ このことは、薬物問題は、薬物使用に際しての注射針の共有だけにあるのではなく、性行動との結びつきも強いことを示唆している。⑥ 一方、これまで毎年1～2人のHIV感染者が確認されていた外国人群では、3名のHIV感染者が認められた。⑦ 病院群での覚せい剤関連患者では、HCV抗体陽性率が40.5%と高く、77.7%の者に、これまでに注射による薬物乱用の既往（以下、注射の既往）があり、この1年間でも62.0%の者に注射の既往があった。また、約58～56%の者にシリンジ及び針の共有経験があり、最近1年間に限っても、約34～31%の者にシリンジ及び針の共有経験があった。ただし、経年的には注射経験率、注射針の共有経験率は低下してきていた。その背景には「あぶり」の普及があると推測された。⑧ 病院群における「あぶり」の経験率は、2000年以降、定着したようである。この「あぶり」は、HIV感染と直接の関連はなく、その気軽さ及びファッショナブルな感覚から覚せい剤乱用自体を拡大させる危険があり、薬物乱用防止の視点からは決して歓迎される形態とは言えない。同時に、その気軽さ及びファッショナブルさから、性行動と結びつきやすい傾向が伺え（本調査で確認されたHIV感染者のように）、今後、薬物使用と性行動との関係に関する対応が迫られよう。⑨ 非病院群の覚せい剤関連患者でのHCV抗体陽性率は31%であり、病院群の約41%よりは低いが、そもそも高いことに変わりはない。⑩ 覚せい剤関連患者について、病院群、非病院群とを比較すると、「入れ墨」のある率と「指つめ」のある率は、それぞれ病院群：非病院群＝31:36と15:17であり、ほぼ同じであるが、「根性焼き」「自傷痕」のある率は、非病院群で高く（17:36、12:27）、若くして薬物乱用を初め、依存に陥った者が、非病院群では病院群よりは多いことを物語っている。しかし、非病院群でのHCV抗体陽性率は病院群よりも経年的低下が著しく、この1年間での注射経験率、針の共有経験率も低い。これらは、この群の者たちが、薬物を断ち切るために、回復支援グループの指導の元で共同生活を送りながら、回復を目指していることの表れでもある。⑪ 以上により、いよいよ、わが国の薬物乱用・依存者群にもHIV感染の危険が現実的になってきた感がある。しかも、本調査によれば、その感染ルートは、薬物乱用時の注射針の共有に限定されるわけではなく、薬物使用が性行動と結びつきやすいことを示唆するものであり、今後、薬物と性行動といった切り口からの対策が要求される結果であった。今後、ますます厳重なモニタリングが必要である。